

## 二〇〇五年のマイベスト 3

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2009-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 越川, 芳明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/3589">http://hdl.handle.net/10291/3589</a>

## 二〇〇五年のマイベスト3

越川芳明

〔読書案内〕とくれば、古典作品を一番に挙げるべきだと考えるが、それは他の筆者の方がなさると思うので、僕はごく最近の現代小説の中から選んでみた。二〇〇五年には、英語圏文学の分野で、優れた長編小説がいくつも翻訳されたから。

たとえば、ジョン・サフラン・フォア『エブリシング・イズ・イルミネイテッド』（ソニーマガジン）。ロシアやポーランドをはじめ大国に翻弄されてきたウクライナ。その国境地帯を舞台にしたコミックなホロコースト（ユダヤ人虐殺）小説。東欧出身の米国ユダヤ人移民の〈自己探求〉＋〈東ヨーロッパの近代史の問い直し〉が小説のテーマだが、I・B・シンガー顔負けの、イディッシュ語の口承文芸の伝統に裏打ちされた法螺話、エロティックな性遍歴、とんでもないドタバタ事件が次々と展開する。ウクライナのユダヤ人は、ほぼ全員ナチスに虐殺さ

れたといわれているが、虐殺にかかわったのはナチスだけでない。この小説では、殺戮にかかわった素朴な一般市民（この場合、ウクライナ市民）の罪意識も同時に問う「ホロコースト文学」のスタンダードナンバーが流れる一方、ユダヤ人よりさらに周縁人のジブシー娘との恋愛が変奏として奏でられ、ユダヤ民族バンザイ調になっ  
ていない点が一番の救いだ。この米国作家は新人ながら、相当の実力があり、将来を嘱望されている。

リチャード・フラナガン『グールド魚類画帖——十二の魚をめぐる小説』（白水社）。大変な奇書である。十二からなる章のそれぞれの扉に、ポットベリード・シーホース（タツノオトシゴの一種）をはじめとして、魚の絵が描かれている。みんな、小説の舞台であるオーストラリア本土の南に位置するタスマニア地域に棲息する魚たちだ。語り手であり絵の作者でもあるウィリアム・グールド（シド・ハメットほか多数の偽名をもつ）は、ゆえなき罪状で海の独房に入れられ、原始キリスト教（カバラ主義）の教えに近いともいえるし狂気の発想ともいえる或る啓示を得る。神の子イエスは魚であり、人間も魚である、と。科学者であれ山賊であれ、植民地支配者であれ囚人であれ、着ているものや地位や肩書を取っばら

えば、残るのは魚と同じ裸の肉体と顔の表情だけだ、と。

ことを怖れない渾身の小説だ。

ピーター・ケアリー『ケリー・ギャングの真実の歴史』

(こしかわ よしあき／英米文学専攻・専任教授)

(早川書房)と同様、植民地時代のオーストラリア史を声なき囚人の側から書き換えるポストコロニアルの「悪漢小説」であり、かつ現代のハイテク産業へと繋がる欧米の産業資本主義文明を批評する、すぐれた「ファンタジー小説」だ。

ステイヴ・エリクソン『アムニジアスコープ』(集英社)。米国の西海岸を舞台にした近未来小説。一人称の語り手「私」は、小さな独立系の新聞社に勤めており、そこで映画評を担当している。小説では、その「私」による女性遍歴に多くの紙幅が割かれている。そんな「私」によって描かれるロサンゼルスは、過去の歴史を蓄積したくない場所、つまり〈健忘症(アムニジア)〉に陥った場所のなれの果ての姿。そうしたロサンゼルスに癒しがたく引きつけられながらも、語り手はかれ一流の米国批判を展開する。かつてエリクソンは愛読書の一つとして、ヘンリー・ミラーの『北回帰線』を挙げたことがあり、〈魂の露出狂〉による自己告白と文明批評を称えていた。『アムニジアスコープ』こそ、エリクソンによる二十一世紀の『北回帰線』と呼んでもいい。恥をかか